はじめに

『状態と変革』領域総括　国府田隆夫

1997（平成９）年10月に発足した本領域の第一期研究者10名が本年９月末で所定の３年の研究期間を終え、ここに成果報告会を開く運びとなった。試みに、３年前の大状況を顧みてみると、国内では東海村動燃の火災爆発事故、神戸事件、山一証券自主廃業など、国外では香港返還、ペルー日本大使館占拠事件、タイ・ロシアでの通貨危機など、90年代に始まり今に続いている世界的規模の社会、経済、政治体制の変革の動きがますます顕著に現れてきた時期であった。この変革の時期に、科学・技術分野では、情報分野を除くと高度成長期以後の沈滞期にあるように思われ、それを分野横断的な気鋭研究者集団による創意ある研究によって打破したいというのが、『状態と変革』という領域名に託された期待と希望であった。物質科学では、現存する物質の安定状態が、表面的には認められない多くの激しい力の相剋と葛藤の結果であること、ひとたび、そのバランスが僅かに平衡点から外れると、思いもかけぬ新しい状態が顕現することがよく知られている。しかし、この可能性を追及し実現するには、外挿可能な連続過程を想定した常識的発想ではだめで、飛躍的な想像（創造）力が必要となる。そのような野心的な３年間の試みと努力の成果が、誰の目にも明らかになっている場合もあろうし、将来の大きな飛躍の可能性を秘めながらまだ潜伏期に止まっている場合もあるだろう。いずれにしても、同じ分野の研究者だけが閉鎖的雰囲気をつくり勝ちなこの国の物質科学研究の状況に飽き足らず、高い理想を共有のものとして、互いに厳しく切磋卓磨する学際的研究の場を築くことができたならば、第一期研究者10名の役割が果たされたことになるだろう。そのような刺激に満ちた研究の発表を期待してやまない。